

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	大戦のころ : 追懷
Author(s)	高森, 良人
Citation	龍南, 200 : 119 - 122
Issue date	1926-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8914">http://hdl.handle.net/2298/8914</a>
Right	

# 大戦のころ

高 森 良 人

時の變轉、世の移替と共に、龍南の歴史にも、幾多の變遷があつた。學校の外觀も、内容も、可なり更まつた。教へる人も、習ふ人も、幾度か替つた。そして、依然として舊套を脱し得ないものは、雨時の學校通ひの本道の泥濘くらゐのものだらうか。



嘉納治五郎さんも、五高の舊職員の一人である。松浦皇子傳育官長もさうである。小泉八雲さんもさうである。夏目さんや、厨川さんもさうである。數へれば、その外にもまだ、えらい人が、澤山あるであらう。卒業生の中にも、名を擡げた人が、幾らもあるであらう。それ等のえらい人々は、今に活躍してゐる人もあれば、已に故人になつた人もある。一國的な人もあれば、世界的な人もある。一時代的な人もあれば、數時代的な人もある。かくして、五十年なり百年なりの後に名を留めて、いつまでも龍南人に親しまれるのは、果してどんな人だらうか。



その頃、或る一部の人々は、授業の合間合間にも圖書館に入つては、ショオの作品を読み耽つてゐた。或る人々は、三四郎だの、草枕だの、社會と自分だのを愛讀した。又或る人々は、雨江全集を味讀した。白村の近代文學十講なども、よく讀まれたものの一つであつた。何せろ一週三十二時間がそこらの中、十八時間を英獨の語學に當てられてゐたばかりでなく、乙類の如きは

更にA Bの二組に分れて、一クラス二十名足らずで英語を學んだ頃なので、語學に對する敬虔の念も可なり厚く、何かしら、原書で讀みたくも思つたりした。そして、あの人はきつと英文學をやるだらうと、(自らもいひ)同級の者と噓してゐた誰彼が、卒業すると急に目的を變更して法科に轉じてしまつたり、あの人こそ政治なり經濟なりを修めるだらうと思つてゐた人が、どんな理由か、あまり趣味もなさうな英文なり國文なりに入つたりして、可なりひどい番狂はせがあつたやうだ。而も、それ等の人々は、果して今もなほ自己の専門とするとともに満足してゐるかどうか、その後滅多に會つて話してみたこともないので、さつぱり分らぬ。

櫻島の大爆發は、何といつても一つの驚異であつた。バラチブスの流行で、可惜十四名かの同窓を喪ひ、盛大な悲痛なる追悼式が武夫原で行はれたことも亦、可なり大きな事件に相違なかつた。思辨的な哲學的な思想などから、まだ何程の刺激も受けてゐなかつた新入生のわれ等に、瑞邦館で或る上級生が、ベルグソンを批判し、ニイチエを紹介し、ヘッケルを讚美し、オストワルドを主張すると、その後立つた他の一人が敬虔な態度といふよりもむしろ慈情的に、而も最も雄辯に宗教生活の眞意義を高調するといふやうな討論に對して、幾度か耳を傾けたことだつたらう。その時ヘッケル、オストワルドを力説した人は、自然科學的研究を積んで相當に名を爲しつゝあるが、宗教的に目ざめてゐた幾人かの知人の中には、或は大學時代すでに宗教的生活を棄ててしまつたり、或は卒業後次第に遠ざかつたりした者もあるやうだ。

課外に源氏物語の講義を聴いたり、論理學の特別授業を願つたり、その頃また白雨會といふ一つの團體が出来て、文學だの、繪畫だの、音楽だの、考古學だの、ロシア語だのといふ風に、いろいろの方面に別れて研究を續けるつもりで、一時は相當に氣

勢を示してゐたやうであつたが、文字どほりに一しきりの夕立で、何時の間にか晴天白日になつてしまつた。その節會員外の自分が或る友人に頼まれて、わざわざ木葉町まで出かけて、滅多に手に入りさうにもないくらゐ大きな木葉猿を買つたまではよかったが、下りの汽車に間に合ふやうに驅け出したはずみに道に落して、折角の代物の胴體を二つに壊してしまつたのを、絲でしばつたまゝ、展覽會に出品したこともあつた。あの時の猿は、その後數年の間親友の書棚の上に飾られてゐたが、何時しかその異様な姿を消してしまつたやうだ。

當時は世界大戰最中で、發火演習の行軍先きの柳河泊りの夜、吉岡校長作の青島陷落の祝勝歌を高唱しながら提灯行列をやつたり、明善校や、修猷館などで、心からの歡迎會を受けたり、演習の最終日を武雄泊りとして、國天に響きわたる煙花の音を耳にしつつ、小學生の出迎を受けたりしては、恰も凱旋將軍のやうな心持にひたつたものだ。熊本以北に高等學校のなかつた頃の五高生が、どれくらゐ持てたものか。

武夫原の晝食も、樂しみの一つであつた。月見草も今に比べてずっと咲き誇つてゐたし、しばふもトラツクや、フィールドなどで荒されてゐなかつたので、三々伍々、殆んど毎日のやうに笑ひ興じたものだ。しかし、一週三時間、三年また四年の歳月を、年から年中鐵砲かついだ頃に較べると、今の學生諸君が、各種のスポーツにすべてを忘れてかけ廻つてゐる間に、自然と運動の趣味もつき、健康も増進して、他日の活動の源泉を涵養してゐるのを見ると、全く羨しく思はれる。庶くはスポーツの運用そのよろしきを獲て、われ等の時がら、恐らくそのすつと以前からなんだらうが、休學や退學のほとんど大部分の原因となつてゐるところの呼吸器系統の病氣を、年と共に減して行きたいものだ。

百名近くの各高等學校の生徒に伍して御用船加賀丸に便乗し、七月の十八日から九月の六日までの真夏の日盛りに、青年士官たちと裏南洋を巡航した時の限りなき印象の中でも、太平洋上の月夜的美観、怒濤逆巻く荒海の夜の軍歌、紺碧の海を漕ぎ廻るカノー、誇らしげなる一群の土人の舞踏、たわわに實る柳子樹の陰の微風、さてはバナナ、パイナップル、マンゴーの佳味芳香など、皆忘れたいものばかりである。

或る日の午後は、神出鬼没猛威を逞しうした潜航艇エムデン號の話で暑さも忘れてしまった。或る晩の茶話會の席上では、土人の歌もうたはれ、ダンスも演ぜられた。かくて板張りに席を敷いただけの處に、一枚の赤毛布と、一個の寢座枕とをあてがはれて、大の男が三疊に四人の割で寢起した後、五十日ぶりに疊の上に蒲團を敷いて眠つた時の心安さ、横須賀に上陸して始めて知つた土人じみた一行の身なり顔色のをかしさ思出の種は盡きぬ。その後四年、古賢の跡をたづねて單身禹域に遊び、旅順の戦跡廢墟を弔ひ、轉じて青島のビルマーク、廻尖角の砲臺の慘狀を目のあたり眺めては、轉々感慨に耽つたこともあつた。



隙行く駒の足のみ速くして、十年一昔は過ぎてしまつた。その間には夏目さんもなくなり、厨川さんも不慮の災を蒙り、齊しく世の人に惜まれたが、その遺稿は、小泉八雲全集とともに、たとひ經國の大業たらぬまでも、不朽の盛事として、龍雨人の血ともなり肉ともなつてあるのではあるまいか。しかも、その間にひとりショオだけは、ノーベル賞の目録だけは貰つて置くなどと、彼一流の皮肉をいつて、相變らず世人を驚ろかしてゐる。

兎も角もかうして一夜を在りし日の思ひ出にひそめると、不幸にして夭折した知友の面ざしなど次から次と浮べられて、自づから淨められる。